

青葉の鬼隠し



今思えば、あれは前触れだったのかもしれない。これから起こる惨劇がけして夢なんかじゃないと、嫌でも知らなければならなかった。毎日が平和で、何事もなく過ぎて行くことがどれだけ有り難いことだったのか。いや、何事もない毎日なんていつか終わってしまうってことを、あるいは教えてくれたのかもしれない。

狂気は、すぐそこまで迫っている。



「あ！国見！」

多分、小説の冒頭によくありそうな表現で言うならば、晴れ渡った空、澄んだ空気が、典型的な夏の空の下、だろう。いつものように国見が欠伸をしながら教室のドアを引くと、背後から金田一の声がした。涙の滲んだ目をジツトリとその方向に向ける。心なしか騒がしい廊下を、金田一が走っているのが見えた。

「なんだよ、朝練なら休みだって……」

「違うって！お前、知らないのか？」

「何が」

朝からテンションの高い部活仲間を軽くあしらいながら教室内に入ると、クラス

メイトが固まって騒いでいるのが見えた。女子がひそひそと噂話をし、男子が互いに眉を顰めながら大袈裟なりアクシオンで会話をしているのはいつもの光景といったらそうなのかもしれないが、それでもやはり国見には、いつもより空気が張り詰めている気がした。

今日は教科書を持って来なければいけない授業ばかりで重いエナメルを机の上にドカンと置けば、前の席の男子、鈴木が金田一と同じように興奮した様子で話しかけて来た。

「おい！今朝の話聞いた？やばくね？」

「……俺、今来たばかりだから」

そう言えば、金田一がキョロキョロと周囲を見回して、口元に手を当てて国見に耳打つように声を顰めた。

「…今朝、三年の女子が飛び降り自殺未遂したんだって」

「……………は？」

思わず手を止めて金田一を見上げる。冗談かとも思ったが、金田一はこんなタチの悪い嘘はつかない。もしこれを言ったのが鈴木だったなら、あーそうですかと軽く受け流していたかもしれないが。国見は今朝から騒がしい校舎内に、ようやく合点がいった。しかも、話によれば自殺未遂をした女子生徒はかなりの美人で、校内でも有名だったようだ。そんな彼女が自ら命を絶とうとしたとなれば、もっぱら

噂にもなるだろう。

「なんでまた、自殺なんかしたんだろうな……」

「完璧そうな人間にも闇はあるってことだろ」

関わったこともない他人を心の底から心配そうに金田一は言う。国見は彼女が死のうとした理由など微塵も興味もなかったが、鈴木の一言でそれもまた変わる事になった。

「それが、自分でも何で死のうとしたのか覚えてないんだってさ」

「は？」

「は？」

今度は金田一と綺麗にハモってしまった。自殺した理由を思い出せない自殺志願者が居るだろうか。もしかしたら噂に尾鰭がついてあらぬ方向に暴走しているのかもしれないが、どうやら鈴木のことについては正しいらしかった。周囲の女子が、やばいよねー、と話の輪に入って来たからだ。女子が来たからか、少し肩身の狭そうにする金田一を横目に、国見はとりえず席に座った。

「保健室で目が覚めて、自分が自殺なんてするわけない、なんかのドッキリですかーって笑ってたらしいんだよ」

「なにそれ、怖ッ」

「ちよっと、なんかの病気なんじゃないの？記憶障害？」

いちいち大袈裟に声を上げて反応を返す女子たちだったが、国見も国見でその不可解な鈴木の話にうすら寒い思いを抱いたのも本当だった。鈴木は国見と金田一から、リアクションを取ってくれる女子に話し相手のターゲットを変えたようだった。

「あ、そういうえげば！」

鈴木が思い出したように国見と金田一を振り返る。噂で聞いたんだけど、と前置きをして、鈴木が言った。

「自殺の原因かは分かんねえけど、その三年の女子がさ、昨日バレー部の及川先輩に告って振られたらしいって」

「……及川さんに？」

モテる男は辛いねえ、とふざけた様子で肩をすくめて鈴木は再び女子と話し始めたが、国見はこの時本気で及川に同情したのだった。

